

# マリヴロンと少女

宮沢賢治

青空文庫



城あとのおおばこの実は結び、赤つめ草の花は枯れて焦茶色になつて、畑の粟は刈りとられ、畑のすみから一寸顔を出した野鼠のねずみはびつくりしたように又急いで穴の中へひつこむ。

崖やほりには、まばゆい銀のすすきの穂ほが、いちめん風に波立つている。

その城あとの中の、小さな四つ角山かくさんの上に、めくらぶどうのやぶがあつてその実がすつかり熟している。

ひとりの少女が樂譜がくふをもつてためいきしながら數やぶのそばの草にする。

かすかなかすかな日照り雨が降つて、草はきらきら光り、向う

の山は暗くなる。

そのありなしの日照りの雨が霽<sup>は</sup>れたので、草はあらたにきらきら光り、向うの山は明るくなつて、少女はまぶしくおもてを伏せ<sup>ふ</sup>る。

そつちの方から、もずが、まるで音譜をばらばらにしてふりまいたように飛んで来て、みんな一度に、銀のすすきの穂にとまる。めくらぶどうの藪からはきれいな雫<sup>しずく</sup>がぽたぽた落ちる。

かすかなけはいが藪のかげからぼつてくる。今夜市庁のホールでうたうマリヴロン女史がライラックいろのもすそをひいてみんなをのがれて来たのである。

いま、そのうしろ、東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふつ

と通つて、大きな虹にじが、明るい夢ゆめの橋のようにやさしく空にあらわれる。

少女は楽譜をもつたまま化石のようすわつてしまふ。マリヴ  
ロンはここにも人の居たことをむしろ意外におもいながらわずか  
にまなこに会えしゃく 祀ささしてしばらく虹のそらを見る。

そうだ。今日こそ、ただの一言でも天の才ありうるわしく尊敬  
されるこの人とことばをかわしたい、丘おかの小さなぶどうの木が、  
よぞらに燃えるほのおより、もつとあかるく、もつとかなしいお  
もいをば、はるかの美しい虹に捧ささげると、ただこれだけを伝えた  
い、それからならば、それからならば、あの……「以下数行分空

白

「マリヴロン先生。どうか、わたくしの尊敬をお受けくださいませ。わたくしはあすアフリカへ行く牧師の娘でございます。」

少女は、ふだんの透きとおる声もどこかへ行つて、しわがれた声を風に半分とられながら叫ぶ。

マリヴロンは、うつとり西の碧いそらをながめていた大きな碧い瞳を、そつちへ向けてすばやく楽譜に記された少女の名前を見てとつた。

「何かご用でいらっしゃいますか。あなたはギルダさんでしよう。」

少女のギルダは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえ

て輝いて、いきがせわしくて思うように物が云えない。

「先生どうか私のこころからうやまいを受けとつて下さい。」

マリヴロンはかすかにといきしたので、その胸の黄や董の宝石は一つずつ声をあげるように輝きました。そして云う。

「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか。」

「私はもう死んでもいいのでございます。」

「どうしてそんなことを、仰おっしゃるのです。あなたはまだまだお若いではありませんか。」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないのでござります。あなたが、もし、もつと立派におなりになる為なら、私なんか、百ペん

でも死にます。」

「あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、立派なおしごとをあちらへ行つてなさるでしょう。それはわたくしだよりははるかに高いしごとです。私などはそれはまことにたよりないので。ほんの十分か十五分か声のひびきのあるうちのいのちです。」

「いいえ、ちがいます。ちがいます。先生はこここの世界やみんなをもつときれいに立派になさるお方でございます。」

マリヴロンは思わず微笑わらいました。

「ええ、それをわたくしはのぞみます。けれどもそれはあなたはいよいよそうでしよう。正しく清くはたらくひとはひとつの大引き

な芸術を時間のうしろにつくるのです。ごらんなさい。向うの青いそらのなかを一羽の鶴こうがとんで行きます。鳥はうしろにみなそのあとをもつのです。みんなはそれを見ないでしようが、わたくしはそれを見るのです。おんなんじょうにわたくしどもはみなそのあとにひとつ的世界をつくつて来ます。それがあらゆる人々のいちばん高い芸術です。」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌います。わたくしはたれにも知られず、おお巨おおくきな森のなかで朽くちてしまうのです。」

「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に与あたえられたすべてのほめ

ことばは、そのままあなたに贈<sup>おく</sup>られます。」

「私を教えて下さい。私を連れて行つてつかつて下さい。私はどんなんことでもいたします。」

「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたが考えるそこに居ります。すべてまことのひかりのなかに、いつしょにすんでいつしょにすすむ人々は、いつでもいつしょにいるのです。けれども、わたくしは、もう帰らなければなりません。お日様があまり遠くなりました。もずが飛び立ちます。では。ごきげんよう。」

停車場の方で、鋭<sup>するど</sup>い笛<sup>ふえ</sup>がピーと鳴り、もずはみな、一ぺんに飛び立つて、気違<sup>きちが</sup>いになつたばらばらの楽譜のように、やかましく鳴きながら、東の方へ飛んで行く。

「先生。私をつれて行つて下さい。どうか私を教えてください。」  
うつくしくけだかいマリヴロンはかすかにわらつたようにも見えた。また当惑してかしらをふつたようにも見えた。

そしてあたりはくらくなり空だけ銀の光を増せば、あんまり、もずがやかましいので、しまいのひばりも仕方なく、もいちど空へのぼつて行つて、少しづかり調子はずれの歌をうたつた。



# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつた

のは、ボランティアの皆さんです。

# マリヴロンと少女

## 宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>